

法隆寺の調査

平城宮跡発掘調査部

1978年度から実施してきた法隆寺の防災工事にともなう発掘調査も、1983年度で終了した。今年度は、1983年5月から1984年3月にかけて、西院伽藍の西半部を中心として、26ヶ所にトレンチを設定して、調査を進めた。発掘総面積は1314m²である。

西面回廊の西側のトレンチでは、旧西室の東雨落溝を検出した。これは、1980年度の調査で検出した部分の延長部にあたる。しかし、西室の南辺部については検出するに至らなかった。

現西室の北側では2基の瓦窯跡（S Y5050・5060）を検出した。いずれも分焰牀をもつ半地下式の平窯である。S Y5060は遺存状況が良好で、焚口・燃焼室・分焰孔・焼成室がほぼ完全な形で残っていた。焚口の幅は約30cmで、西側に丸瓦を立てている。燃焼室は幅約80cm、長さ90cmで、奥壁に3ヶ所の分焰孔が設けられている。焼成室は長さ約1.4m、幅約1.1mで、床面から約1.1mの高さまで窯壁が残っている。分焰牀は幅約20cm、高さ約15cmで、2条ある。窯の周囲には幅約35cmの素掘溝をめぐらしている。この窯の焼成室埋土から鎌倉時代の軒平瓦が出土した。S Y5050は分焰牀をもつ半地下式の平窯であるが、焼成室が残るのみであった。規模はS Y5060に近い。西室が現位置に建てられたのは、棟木の銘から寛喜3（1231）年と考えられている。その際に背後の崖面を削って整地したため、瓦窯の一部が破壊されたものとみられるしたがって、検出した2基の瓦窯の操業年代は、遅くとも13世紀前半のことになる。

大湯屋前の参道では、南北幅約2.4m、東西幅約2mの大石を据えた石組遺構（S X5170）を検出した。石の上面は、現地表下約10cmの深さにあり、かつて地上に現われていたようである『古今一陽集』に、三伏蔵の一つが浴室の前にあると記されている。その伏蔵がこれに相当するものと思われる。

この他、取納庫の新宮予定地として選ばれた律学院北の空地においても、1983年10月から12月まで発掘調査を実施した。発掘面積は630m²である。発掘区の東辺と南辺において、若草伽藍跡や法隆寺東院下層遺構（推定斑鳩宮跡）の方位とほぼ一致する飛鳥時代の溝を検出した。また、ここでは近世の遺構なども検出している。

法隆寺『法隆寺発掘調査概報Ⅲ』1984参照。 （森 郁夫）